



編集・発行

大阪府立

呼吸器・アレルギー医療センター

大阪府羽曳野市はびきの3丁目7-1

TEL: 072-957-2121

FAX: 072-958-3291

HP: <http://www.ra.opho.jp>

E-mail: kokyucen@ra.opho.jp



5月の歳時記

副院長

おおた みつり
太田 三徳

陰暦ではさつき(早苗月、皐月)です。主な行事は、端午の節句、母の日、葵祭でしょうか。

端午の節句と鯉のぼり: 中国の故事に黄河の龍門といわれる急流を登ることができた鯉が竜となったので、鯉の滝登りが出世の象徴と言われていたため、江戸時代に関東地方の武家で、端午の節句の日まで、庭先に鯉の吹き流しを上げる風習が始まりました。なお当時は、(黒色の)真鯉 1 匹だけでした。明治になり緋鯉が加わり、昭和になってから青い子鯉が加わった様です。

母の日: 日本と北米、中南米、ヨーロッパ各地、大洋州と東アジアでは 5 月第 2 日曜日ですが、中東諸国 3 月 21 日(春分の日)、ロシア 11 月最終日曜、イギリス・アイルランドは 3 月末頃の日曜日と各国様々です。米国では、負傷兵の衛生状態改善に尽力した母を偲んで、1907 年 5 月 10 日に娘が教会で白いカーネーションを配ったのが起源です。日本では昭和 12 年 5 月 8 日の「母の日大会」が元になり、昭和 24 年(1949 年)から第 2 日曜になりました。

葵祭: もとは下賀茂神社と上賀茂神社でおこなわれる賀茂氏と朝廷の行事。嵯峨天皇が娘を賀茂神社の神事に奉仕することにした(810 年)のが齋王のはじまりで、以後皇女が勤めました。祭祀を執り行う時の行列は華麗で「枕草子」や「源氏物語」にも描かれましたが、齋王制度は 1212 年に財政難で廃絶しました。1953 年に祭りが復活してからは一般市民の未婚の女性を齋王代としています。

日が長くなるこの季節はまた、体調の変化を来しやすい季節でもあります。

この頃から乳幼児、小児には手足口病というウイルス性疾患が増えます。手のひら、足の裏、口の中の発疹と水疱、発熱がみられ、大部分は 10 日程度で自然に治ります。まれに髄膜炎等の中樞神経系の合併症を起こし、入院が必要となります。

梅雨の頃からは、中年の女性に多い、夏型過敏性肺炎が増えます。トリコスポロンというカビを吸い込んで、咳、発熱、呼吸困難などがおきます。家では掃除や風通しを良くしてカビを除いたり防御マスクの使用で軽くなります。咳が続くときは、夏風邪以外にこの病気も頭においてください。

また、動物の発情期でもあるこの時期は、脳下垂体の機能がたかまり、性ホルモンの分泌がさかんになります。心がうきうきしたり、いらいらしたりして、精神が不安定になります。新入生や新社会人の 5 月病もこの季節のせいでしょうか。

皆様、体調管理には充分御注意ください。

CT 撮影装置が新しくなりました

放射線科部長

ひがみ たいぞう
樋上 泰造 (画像診断)

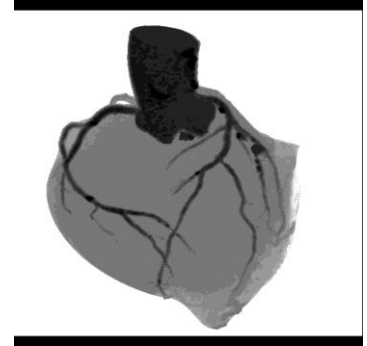
画像診断の言葉から、“レントゲン”よりも CT や MRI あるいは超音波検査を連想する人が、多くなって来ているようです。

と言っても、レントゲン写真の役割が終わることはまだまだないようですが、CT 装置の進歩にはめざましいものがあります。近い将来、ほぼ完全に置き換わるかも知れません。

CT は、レントゲン検査と同様に放射線(レントゲン)を使って患者様の写真を撮っています。体を輪切りにした断面が見られ、内部の構造を精細に見ることが出来ます。当院での CT 検査数は、年間に 1 万件ほどにのぼります。

さて、本題です。昨年12月に、最新のCT撮像装置が導入されました。簡単に説明すれば、“より広い範囲を、より速く、より精細”に、撮像できるようになりました。動くものが“ぶれ”て撮れてしまうのは、日頃から経験しているところです。そこで、お父さんたちは、シャッタースピードを速くして子供の勇姿を撮ろうと、運動会で頑張っています。CTでも同じで、速く撮れば、動くものでも止まっているかのように写真に出来ます。

もう、お分かりですね！新CTでは、心臓でも止まっているかのように撮れてしまいます。心筋梗塞などの患者様に、皆さんご存じの心臓カテーテル検査が施行されています。心筋に栄養を送っている動脈(冠動脈)を撮像したり、狭くなっている冠動脈をバルーンで拡げて治療したりしています。CTでは、もちろん治療は出来ませんが、造影剤を使って心臓(冠動脈)を撮像出来るようになりました。心臓カテーテル検査と同様に、循環器内科医が担当しています。



<薬局の紹介シリーズ⑤>

がんの治療について

薬局

うすい なおこ
碓氷 尚子

がんの治療には、手術・放射線療法・薬物療法があります。薬物療法の目的は、がん細胞の種類や、がんの進行の程度により4つに分かれます。

- ① がんを治癒させる(治す)
- ② がんの進行を遅らせる
- ③ がんの再発、転移を防ぐ
- ④ がんにより起こる痛みなどの症状を和らげる



つまり、副作用をコントロールしながらがんに対する効果を得て、その結果として治癒、生存期間の延長、症状緩和、QOL(生活の質)の維持と向上をめざすことにあります。

抗がん剤には色々な種類があり、投与方法も様々です。その選択はがんの種類、部位、進行度、および患者さんの症状、全身状態などをもとに行います。

投与方法には、注射(点滴)、内服(飲み薬)などがあります。そしてそれぞれの薬剤を単独または併用して投与します。投与する薬剤によって、また患者さん個人によって、投与量、投与回数、投与期間は異なります。内服の抗がん剤のなかには、効果や副作用が食事の影響を受けるものもありますので、医師、薬剤師、看護師から説明があります。

がんの治療による副作用は、ほとんどすべての患者さんに現れます。使用する抗がん剤の種類、患者さんの体調や体質なども影響します。同じ治療を行っても、すべての患者さんに副作用が一樣にあらわれるわけではありません。どのような副作用がどのくらいの時期にどの程度あらわれる可能性があるのか、またその予防や対策について、必ず治療を始める前に主治医に十分説明してもらいましょう。起こりうる副作用が予測でき対処法がわかっているならば、安心して治療を受けることができます。わからないこと、不安なことがあれば医師や薬剤師、看護師に相談してください。

5月の教室案内

*カンガルー教室	●5月2日・16日・23日	午後1時半～	第1会議室
*喘息教室	●5月17日	午後1時45分～	第2会議室
*禁煙教室	●5月10日	午後3時30分～	医療情報コーナー